

ナチュラル・アプローチを導入した 高校英語教育の実践的研究

—インプットの強化をめざして—

清 水 武 雄

群馬大学教育学部英語科教育

多 賀 谷 弘 孝

群馬県立館林高等学校

(1990年4月9日受理)

A Practical Study of English-Language Teaching at a High School

—Through the Input Hypothesis—

Takeo SHIMIZU

*Department of English, Faculty of Education, Gunma University
Maebashi, Gunma 371, Japan*

Hiroataka TAGAYA

Tatebayashi High School, Tatebayashi, Gunma 374, Japan

(Accepted April 9, 1990)

Employing Krashen's Input Hypothesis as our basis, we have studied to present in this paper a new method in which high-school students will be able to grasp, even in a 50-minute classwork, the outline of a fairly long reading material through the three stages: Motivation, Input Activities and Creative Output.

This new method will surely enable us JTEs to break away from the conventional Grammar-Translation Method and to improve students' communicative competence as well.

I. はじめに

英語教育に於いて文法・文型指導を中心とした訳読主義からの脱皮が叫ばれるようになって久しい。生徒のコミュニケーション能力の育成を図ると共に、英語を通して生徒の人的成長を目

指すことがその大きな目標となった今日、従来の指導法を反省し、新たな指導法に関する研究が各方面で推進されている。

しかし、多くの教育現場では、後述するように、まだまだ旧態依然たる文法・訳読中心の指導が主流となっている。その結果、生徒の多くは教師の施す訳などを書き写すことに精力を使い果たし、教科書本文の内容を把握するまでには至っていない。しかも、1時限(50分)の授業時間で、わずか数行からせいぜい1ページ程度しか読み進み得ないため、生徒の成就感、あるいは生きた英語を学んでいるとの実感も希薄になってしまう。当然、そうした授業は、生き生きとしたコミュニケーション能力育成の場となり得ず、生徒の主体性の発揚も困難となる。

一方、コミュニケーション能力の育成を狙うあまりに、学習内容の理解が不十分なまま、性急に生徒から英語の応答を求めたり、発話場面に重点を置くことで生徒の英語に対する恐怖心を逆に助長してしまう傾向もなくなかった。

私たちは、高校の英語教育で訳読に依存し過ぎることなく、目標とする文章の内容を深く理解させ、しかも、生徒が生き生きと主体的に参加できる授業形態について研究と実践を続けてきた。

本稿は Stephen D. Krashen らの言語習得理論である「インプット理論」(Input Hypothesis)を援用し、〈Motivation〉〈Input Activities〉〈Creative Output〉の3段階のプロセスを通じて生徒の情意フィルターの低減化を図りつつ、音声・文字両面から多様なインプットを与えることで、ある程度まとまった量(教科書3ページほど¹⁾)の英文の大意を50分という限られた授業時間内で把握させると共に、生徒が主体的にコミュニケーションを行おうとする態度の育成を可能とする指導のあり方について考察したものである。

II. 高校英語授業の実態

私たちは高校英語授業の実態を探るべく、資料1(129ページ)のようなアンケートを群馬県内の高校英語教師50名(実業系25名,進学系25名)に実施し、以下のような結果を得た。

〈授業で特に力を入れていること〉

文法事項の指導 19名 (38%)	訳し方の指導 15名 (30%)	内容理解 9名 (18%)	受験 3名 (6%)	その他 4名 (8%)
-------------------------	------------------------	---------------------	------------------	-------------------

〈現行の指導法について〉

改善の必要を感じる 39名 (78%)	仕方なし 6名 (12%)	満足 4名 (8%)	わからない 1名 (2%)
---------------------------	---------------------	------------------	---------------------

「日常の授業で特に力を入れて指導していることは何か」という問いに対し、50名中、実に34名の教師が「文法事項」と「英文の訳し方」の指導と回答している。一方、「英文の内容理解」という回答は9名、「受験指導」3名、「その他」4名であった。

また、文法事項、英文の訳し方に重点を置く理由としては次のような回答があった。

- 生徒の基礎力が弱いから。(7名)
- 文法・訳読をやらないと生徒が不安がるから。(6名)
- 大学受験を控えているから。(6名)
- 文法・訳読方式が英語学習の基本であり、これができなくては高度な活動は望めないから。(4名)
- 訳をノートに写させるような作業を行わせないと授業が成立しないから。(2名)
- 工夫して授業を改善したいと思うが、時間的、精神的余裕がないから。(2名)

一方、英文内容の理解を授業の中心とする理由としては、以下の通り回答があった。

- 各文が訳せても全体の文意を把握できない生徒が多いから。(5名)
- 以前は文法・訳読中心の授業をしていたが、生徒、教師ともにマンネリ化に陥ってしまったから。(4名)
- 大学入試で大意把握の出題が増えているから。(3名)
- 英文を読み進める楽しさを生徒に味わわせたいから。(1名)

また、「自分の現在の指導法についてどう思うか」との問いに対しては、39名の教師が「改善したい」と答えているが、とりわけ文法・訳読中心の授業をしている教師の8割以上にあたる29名が、「授業のマンネリ化」「時代の要請に適していない」などの理由から、改善の必要性を痛感していると回答したことは特筆すべきことである。

次に、1時限あたりの授業の進捗については、文法・訳読中心の教師の場合、平均値は約0.6ページ、そして、内容理解中心の教師の場合、約0.9ページとなっている。一方、「1時限あたりの授業進捗はどれくらいが適当であると思うか」という問いに対しては、対象者全員の平均値は1.2ページであった。

今回のアンケート調査によって次のことが判明した。

- 高校の英語授業は依然として文法・訳読中心の指導が行われているが、大半の教師がそこからの脱皮を望んでいること。
- 教師は1時限の授業で、ある程度まとまった量(1.2ページ程度)の英文を生徒に読ませたいと考えているが、こまごまとした文法事項の指導や生徒指導に時間をとられて思い通りにはいっていないこと。

すなわち、現場教師は理想と現実とのギャップの中で日夜苦悩しつつ、現状を打開できないでいる一方、生徒も単調な授業の中で受動的・消極的に終始しているということである。

以上、高校英語教育の実情について概観したが、次にこうした現状を踏まえた上で、新しい指導過程の工夫について考察していきたい。

Ⅲ. インプット理論を生かした指導の工夫 —— 〈Motivation〉, 〈Input Activities〉, 〈Creative Output〉 ——

私たちは、高校に於ける読解授業の1つの形として、下記のような三段階過程による指導を考え、群馬県立館林高等学校3年生を対象に実践してみた。

1. 〈Motivation〉段階
2. 〈Input Activities〉段階
3. 〈Creative Output〉段階

各段階の狙いと具体的な指導内容及び留意点等については次の通りである。

1. 〈Motivation〉段階

まず、生徒の情意フィルターを低減化するために、英語の歌、ゲーム、クイズ、Total Physical Responseなどの活動を行う。この段階で生徒をリラックスさせ、興味・関心を喚起できるか否かが授業の大きな鍵と言えるからである。その際の留意点としては、

- ・生徒の聴解力の養成に寄与するような活動を中心として、Delayed Speechの考え方に立ち、ここでは性急に英語での応答、発話を求めることはせず、あくまでも生徒の意欲とリラックスした雰囲気作りに主眼を置くこと
- ・生徒同士、あるいは教師と生徒間の心の触れ合いがもてるような活動を工夫していくことなどが挙げられる。

2. 〈Input Activities〉段階

情意フィルターが低下し、英語を習得し得る心的状態が整ってから、音声、文字、視覚などに訴える多様なインプットをできる限り大量に与え、教科書本文の大意を把握させる。教師によるオーラル・イントロダクション、写真、資料等の提示説明、黙読、トピックセンテンスの発見、要約などがここでの主な活動となる。留意事項としては、

- ・本文内容の手助けとなるようなピクチャーカードやその他の資料を積極的に用いて、視覚、聴覚両面から多くのインプットを与えるよう工夫すること
- ・オーラル・イントロダクションは、基礎力の定着していない生徒の不安感を除去するために、原則として中学校で既習の文法事項を用い、極力Basic Englishで行うこと²⁾。また新出語や生徒にとって理解が困難と思われる表現等については、適宜平易な表現に言い換えること
- ・オーラル・イントロダクション、テープ・リスニング等で理解可能なインプットを音声面から十分に与え、生徒に教材の内容を大まかに理解させてから本文に入るようにすること
- ・教師は予め読解の手助けとなるような設問を準備しておき、しかも、その設問は生徒が想像力を働かせながら本文を読めるようなものに工夫すること
- ・あくまでも内容の理解を中心とし、文法事項等を意識させないようにすること

- この段階でも情意フィルターが高まるのを防ぐために、内容の理解度の確認では最初から完璧な答を要求せず、Yes/No や 1 語による解答、または日本語による解答も認めること
- 各段落のトピック・センテンスを捜しながら読み進め、大意を要約する練習もさせることなどが挙げられる。このような手立てにより、全員の生徒がリラックスした雰囲気の中で、日本語訳や教師の文法事項の説明に依存し過ぎることなく自らの力で英文を読み進め、内容を理解していくことが可能となると考える。また進学校に於いては、大学入試の大意把握に類する出題に対応できる力を育成できよう。

3. 〈Creative Output〉段階

前段階で強化されたインプットを創造的なアウトプットに結びつけ、生徒を主体的コミュニケーション活動に参加させることがこの段階の目標である。本文の内容に関する Q's & A's や、ディスカッション、劇化、感情を込めたリーディング、インフォメーション・ギャップを利用したゲームなどがここでの主な活動となる。

従来、本文の学習を終えると、そこに出てきた文型及び文法事項の定着化のみに目が向けられ、せっかく読んだ本文の内容とは無関係の機械的練習が行われることが多かった。私たちは、この段階で本文についてのディスカッションや本文に即した練習問題を生徒に課すことが必要と考える。それによって本文理解が一層確実なものとなり、英語を通して何かを学んだという成就感を生徒に与えることが可能となるであろう。

ここでの留意点としては、

- 生徒の発話内に文法的誤りがあったとしても、極力注意は控え、誰もが気軽に発言できる雰囲気作りに重点を置くこと
- 本文の内容に関する Q's & A's やディスカッションに於いては、最初からすべて英語で行うことを強制せずに、「日本語」→「日本語と英語の混合」→「英語」といった段階を意識して指導すること
- 必要に応じて生徒を 4～5 人のグループに分け、発話のチャンスが多くなるようにすること

などが挙げられよう。こうしたことを留意することによって、主体的に英語でコミュニケーションする態度を育成しながら、同時に本文についての理解をより深めることができると考える。

IV. 実践例

以上のような観点に基づいて、私たちは館林高校で実践を行った。館林高校は、群馬県内の、いわば中堅進学校の 1 つで、大学進学者が 7 割程度、就職あるいは専修学校へ進む者が 3 割程度である。生徒は比較的純朴で素直な反面、主体性に欠ける怨みがある。英語に関しては、基礎力の不十分な生徒も多く、3 年生になっても中学校での既習事項が定着していない生徒もいる。

さて、以下に示すものは、館林高校 3 年生を対象としたリーダーの授業実践例の概略である。

1. 対象：館林高校3年生
2. 題材：Unicorn English Readers II B (Revised Edition)

Lesson 5：Under the Atomic Clouds, Part 5 & 6（資料2参照）

3. 本時の目標（配当時間8時間中7時間目）：

Part 5 及び 6 の概要を把握し，簡単な英語で内容について話し合う。

4. 授業の展開

本時の授業を〈Motivation〉，〈Input Activities〉，〈Creative Output〉の3つのプロセスを基本に次のように進めた。以下，実際の授業の流れに沿って各活動の狙いと授業の一部を紹介する。

〈Motivation〉

- ① 「3年5組の歌」（歌詞は英語）

生徒と教師の合作であるクラスの歌を生徒のギター伴奏の下に全員で合唱し，生徒の緊張感を和らげ，英語授業の雰囲気盛り上げる。

- ② 英語によるやりとり

T：Are there any absentees?

S₁: Yes. S₂ is absent.

T：Do you know why he is absent, S₃?

S₃: He has cold.

T：I see. Please be careful not to catch cold.

⋮

〈Input Activities〉

- ① 復習

T：Listen to the tape carefully.

（テープを聞き終えた後）Now, please make pairs, and ask your partner the three questions you thought of at home.

S：（2人1組となって，宿題にしておいた本文の内容に関するQ's & A'sを行う。）

T：O. K. S₄, ask S₅ your question.

S₄: What did Ritsuko do before she died?

S₅: She coughed up a lot of blood.

T：Very good.（同様に何組かの生徒を指名し，互いにQ's & A'sを行わせる。答は1語でも認める。）

- ② オーラル・イントロダクション

T：I'm going to tell you the outline of today's part. Listen to me carefully. O. K.? In the fall, Kayano, her father and her brother went back to Urakami. Urakami was very different.（原子爆弾が投下された後の「浦上天主堂」などの写真を見せながら）Everything was des-

troyed. The atomic bomb destroyed everything there

S: 教師の説明を聞きながらメモをとる。

T: (オーラル・イントロダクションを終えて) I would like some of you to tell us what you have written down. S₆?

S₆: 茅乃さんたちは秋に浦上に戻りました。

T: Right. They went back to Urakami in the fall.

S₇, how about you?

S₇: Urakami was different.

T: Good. But how or in what way was it different?

S₇: (考え込みながら) 破壊されていた?

T: That's right. Look at this picture. Urakami was completely destroyed.

(同様にして数名の生徒に聞く。)

③ 設問に答えながらの黙読

T: Open your book to page 76. Read today's part silently and answer the questions on your study sheet.

S: (予め配布された授業用プリントの設問—基本的には英語であるが、難しいと思われる場合は日本語で一に答えながら本文を黙読する。)

T: Stop reading. Now, let me ask you some questions.

What happened to the house, the camellia tree and the garden, S₈?

S₈: They were gone.

T: Very good. Everything was gone. What made everything be gone, S₉?

S₉: Atomic bomb.

T: That's right. The atomic bombing on August 9 destroyed everything.

(同様にして数名の生徒に設問の答を発表させる。)

④ 音 読

生徒2人1組のペアで、交互に本文を読ませる。新出単語の発音等については本課の第1時間目で指導済み。

T: Now, make pairs again, and read the story to your partner.

〈Creative Output〉

生徒の発話の機会を多くするために4～5人1組のグループを作らせ、本文の内容に関して次のような活動をなるべく英語を用いて行わせる。

- 疑問点の話し合い。
- 本文内容についてのQ's & A's
- 本文を読んだ感想の発表

この間、教師は机間巡視しながらグループの質問に答えるなど進行の手助けをする。また、これらの活動の具体的内容については、グループ内の記録係（輪番制）に授業後提出するよう指示し、本時を終える。

5. 授業を終えて

クラスの歌に始まり、最後のグループ活動に至るまで、生徒は終始明るく生き生きと授業に参加していた。本文の指導を終えてから、内容理解度を確認するための豆テスト（英語による Q's & A's と本文に合う英文を選択する形式）を実施したところ、クラスの7割以上の生徒が9割以上の高い正答率を残した。

本課の学習を終えた生徒（40人）にアンケートを行った。以下にその回答の一部を示す。

(ア) 歌をうたうことについて

「良い」：24人

- ・やる気がわいてくる。（4人）
- ・すぐ教科書に入るより気が楽になる。（3人）
- ・緊張感がほぐれ、リラックスできる。（3人）
- ・良い歌を聞くと気分がいい。（1人）
- ・アット・ホームな感じになる。（1人）
- ・ヒアリングに役立つ。（1人）

「悪い」：1人

- ・聞くだけならいいが、歌うのは苦手だ。

「どちらとも言えない」：7人

- ・歌しだいである。（2人）

(イ) オーラル・イントロダクションについて

「役立つ」：19人

- ・最初に内容をだまかに把握しておくで本文に入ってから理解しやすい。（7人）
- ・ヒアリングの練習になる。（4人）

「役立たない」：3人

- ・口で言われるとわからない。（2人）

「どちらとも言えない」：17人

- ・役に立つのかわからない。（3人）
- ・大学入試には関係ない。（2人）

(ウ) 英語を使った授業について

「良い」：21人

- ・英語に慣れる。（6人）
- ・ヒアリングの練習になる。（5人）

- 英語の授業なのだから当然である。(3人)

「悪い」：3人

- 分からない時がある。(2人)

「どちらとも言えない」：10人

- 教師の説明が分からないと困る。(3人)

(エ) 逐語訳のない授業について

「良い」：15人

- 全体の内容がつかめれば必要ない。(6人)
- 速読速解が大切だと思う。(4人)

「悪い」：7人

- 進度が速くなり、テスト範囲が増える。(3人)
- テストで訳が出題されると困る。(3人)

「どちらとも言えない」：11人

- 理想だとは思いますが大学入試が心配だ。(3人)

アンケートにも示されているように、歌を通しての情意フィルター低減化はかなり成功したように思われる。オーラル・イントロダクションの英語はかなり平易にしたつもりであったが、まだ理解できない生徒もあり、今後の課題と言えよう。逐語訳をやらないことに対する生徒の反応は予想以上に好意的であった。しかし、生徒も懸念しているように、定期試験では和訳の出題を極力避けるなどの工夫が必要となろう。

また、本時の授業に於ける文法事項はすべて既習のものなので、授業の焦点を本文の大意把握に絞った。しかし、本文中のいくつかの表現を取り上げ、コミュニケーション活動の中で習熟させていくような工夫が必要であったように思われる。

V. おわりに

本研究では高等学校の英語授業に於いて、文法・訳読に依存することなく英文の大意を把握させ、創造的コミュニケーション活動に導くための方法を実践的に探った。研究がスタートしてわずか1年であるが、〈Motivation〉、〈Input Activities〉、〈Creative Output〉の3つのプロセスを通して、生徒の情意フィルターの低減化を図り、大量のインプットを様々な形で与えることによって、日本語訳を一々与えなくとも生徒に英文を理解させることは可能であるとの実感強くした。しかし、質の高いアウトプットを導き出す工夫や大学入試との兼ね合いなど解決せねばならぬ課題もある。

本稿で提示した指導過程は、館林高等学校での実践・検討に基づくものである。今後、さらに様々なレベルの高校に於ける実践の中で、改善すべき点も多々出てくると思われるが、それにつ

いては別の機会に報告していきたい。

国際化時代に対応した英語教育の必要性が高まった今日、伝統的な文法・訳読方式に代わる英語教授法の開発が英語教育に携わる者にとって緊急の使命であることは論を俟たない。本研究に対し、諸先生からの御教示が頂ければ幸いです。

注

- 1) 従来の授業に於いては、1時限に教科書1ページ読み進めるのが限度であったことから、私たちは本研究に際し、1時限で3ページ読み進めることを大まかな目標とした。
- 2) 学習者は自分の能力よりもややレベルの高いインプットを与えられることで言語を習得する、というクラッシュェンの理論に反するようにも思えるが、ここは本文理解の基本段階であり、全生徒に理解できるよう配慮した。

参考文献

1. Krashen, S. D. & Terrell, T. D. *The Natural Approach* (Pergaman / Alemany) 1983
2. 新しい英語科授業の創造 渡辺時夫ほか (桐原書店) 1986
3. 英語は楽しく学ばせたい 松畑熙一 (研究社) 1982
4. 学習者中心の英語教育 羽鳥博愛・松畑熙一 (大修館書店) 1980
5. 英語教授法のすべて 伊藤嘉一 (大修館書店) 1984

資料1.

英語の授業についてのアンケート

英語教師歴 () 年
 勤務校 ・実業校 ・進学校 ・その他 ()
 現在使用しているリーダーの教科書
 ()

☆日常の授業についてお答えください。

1 授業で教科書を使いますか。

ア いつも使う イ たいてい使う ウ たまに使う
 エ ほとんど使わない

2 1でウ、エと答えた方はその理由を教えてください。

3 授業でとくに力を入れて指導している点は何ですか。その理由も教えてください。

ア 文法事項の指導 イ 英文の訳し方 ウ 入試問題の解き方
 エ ポキャブラリーを増やすこと オ 英文の内容理解
 カ その他 ()

理由

4 あなたの指導法は次のうちどれに近いと思いますか。

ア 訳読文法中心 イ 内容理解中心
 ウ コミュニケーション中心

- 5 あなたの現在の指導法についてどう思いますか。

- 6 授業で英文の訳をやりますか。理由も教えてください。

ア いつもやる イ たいていやる ウ たまにやる

エ ほとんどやらない オ まったくやらない

理由

- 7 英文の内容を生徒に理解させるために何をしていますか。

()

- 8 1時間の進度は平均どれくらいですか。

() ページ程度

- 9 1時間の進度はどれくらいが適切と考えていますか。

() ページ程度

ご協力大変ありがとうございました。

76— Lesson 5

stronger than the war, and it is good that there is no need for the atomic cloud any more.

5

In the fall, Daddy, my brother and I all went back to the house in *Urakami* by car. The fruit on the shaddock tree was beginning to get ripe. *Urakami* was a very different kind of place. There was nothing left — our house, or the camellia tree, or the garden, or Mummy's sewing machine, or Daddy's books, or my picture books, or the kitchen where Mummy used to make *tempura*, or the swing my brother and I would often swing on, or the telephone, or my slippers, or anything. And none of my friends were there, either — *Masanori*, or *Isamu*, or any of them, and old Mrs. *Fukitani* was gone too, and so were Mrs. *Tsujimoto* and the *Tenshudo*, and my mother.

All was gone. I could not understand why, so I asked, "Why is everything gone, Daddy? Why?"

Daddy said, "It's because of the war." So I said, "Does a war always make everything go away?" Daddy said,

slippers [slɪpərz] pl.

19. **It's because of the war.** Cf. The bus stopped from time to time. It was *because of the snow*.

教科書P. 77

Lesson 5—77

“Yes, it certainly does.” I asked him, “Why does it?”
Daddy did not answer me, so I did not understand why.

We had a little hut like a box, made out of some logs and some sheets of tin and our old stone fence, and that hut was what we used for a house. It was so small that when we all went to sleep it was very crowded. Once my brother said, “It’s crowded, but it’s warm,” and I said, “Yes, it’s warm but when we’re sleeping you always kick me, and that hurts me.”

6

Later that year there was a big funeral service for all the dead on the *Tenshudo* grounds; the *Tenshudo* was ruined. The service was for eight thousand dead people. The relatives of the dead people held white crosses, eight thousand crosses. I held a cross with my mother’s name on it. The number of white crosses was more than that of people present at the service. It made everybody cry.

After the service we went to visit Mummy’s grave, where Daddy had buried her ashes. There was a little stone Daddy had put there, and we set up the white cross I

tin [tin] **fence** [fens] **funeral** [fjúnərəl] **service** [sérvis]
relative(s) [rélativ(z)] **grave** [greiv] **ash(es)** [æʃ(iz)]

11-2. **the dead** = dead people.

教科書P. 78

78 — Lesson 5



The Statue of Saint Agnes

carried at the funeral service.

That happened four years ago. Daddy has been sick in bed ever since. He has lost a lot of weight and he is so thin now. But I am getting very big and tall.

My mother's grave does not get any bigger or any smaller.

Whenever I go and visit her, the stone and the cross just stand there. Now I can read what Daddy wrote on the cross four years ago, when he put it on the grave:

Marina Nagai Midori. Died August 9th, 1945.

Mummy went to Heaven as the atomic cloud went up. Now I understand why the atomic cloud looked so beautiful in the sky.

I shall never in my life forget the atomic cloud.

weight [weɪt] **thin** [θɪn] **Marina** [məˈrɪnə]

9-10. **does not get any bigger or any smaller** 大きくもならないし、小さくもならない。